山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第170集

山梨県甲府市北口2丁目

日向町遺跡発掘調査報告書

—公用車車庫建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1999. 12

山梨県教育委員会
山梨県総務部

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第170集

山梨県甲府市北口2丁目

日向町遺跡発掘調査報告書

—公用車車庫建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1999. 12

山梨県教育委員会
山梨県総務部

序　文

本書は、山梨県総務部が計画する、甲府駅北口２丁目公用車駐車場の車庫建設に先立ち県埋蔵文化財センターが実施した、日向町（ひゅうがまち）遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。

本発掘調査が行なわれた地域は、中世戦国期の武田信虎・信玄・勝頼親子三代の時代には、躑躅ヶ崎館（国史跡武田氏館跡）を拠点に開かれた城下の東南端にあたり、日向町と呼ばれる地域でありました。

近世には県指定史跡甲府城の城下にあたり、追手門に近い位置にあることから武家地として土地利用が幕末までなされ、日向町と呼ばれていました。

明治時代以降は、製糸業の工場が建設され、本県における殖産工業の発展を支え、太平洋戦争の折の甲府空襲に遭いながらも復興を遂げ、ＪＲ甲府駅北口という地の利の良さから、現在では住宅・商業地域として栄えてきております。

この地は、中世から現在まで本県の中心地の一角でありますが、その名残を見ることはできません。発掘調査によって、地中に残されたかつての姿から山梨の歴史の一端を後世に伝えることができればと念じております。また、本書が子供たちへ郷土の歴史を語る教材として活用していただければ幸せに存じます。

最後に調査に協力いただきました周辺住民の方々並びに関係機関、調査参加者の皆様に感謝申し上げます。

1999年12月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

例　言

1．本書は、山梨県甲府市北口２丁目14に所在する日向町遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は山梨県総務部による公用車車庫建設に伴い実施されたものである。
3．発掘調査は山梨県教育委員会学術文化財課が調整をとり、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
4．発掘調査は同センター調査研究第１課八巻与志夫・宮里学が担当した。
5．発掘調査・本書使用の遺構・遺物写真撮影および、本書作成にあたり執筆・編集・校正は宮里が行なった。
6．基準点は国土座標を用いいた。
7．本調査地点の西と北でも甲府市教育委員会による発掘調査が実施された。これにより、将来遺跡名の混同が生じるもあるが、本書では便宜上日向町遺跡とした。
8．発掘調査から本書刊行にあたり次の方々よりご協力・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
志村憲一・平塚洋一・佐々木満・早川さやか（甲府市教育委員会）、降矢哲夫、池谷喜久馬、弦間千鶴、柏木まつ江、地域周辺の皆様（順不同・敬称略）
9．発掘調査から本書刊行まで作業に従事したのは下記のとおりである。
（発掘調査）
村田勝利、森下豊、関口巌、唐沢映子、西牧慎一郎、宮久保真紀、山田静代、藤田忠武、島田恵美、小林明男、前田博幸、清水洋一、手塚博臣、上田高義、辻紀子（順不同・敬称略）
（整理作業）
唐沢映子、宮久保真紀、山田静代、島田恵美、辻紀子、船場昌子（順不同・敬称略）
10．調査組織は以下のとおりである。
所長　大塚　初重
次長　藤田　修・田代　孝
調査研究第１課長　末木　健　調査研究第２課長　坂本　美夫
調査研究第１課第１担当　主査文化財主事　八巻与志夫　文化財主事　宮里　学
11．出土した遺物・記録図面・写真および、本書に掲載されているものは山梨県埋蔵文化財センターで保管してあるのでご活用下さい。

凡　例

1．各種遺構番号は、調査の段階で発見された順番で付したもので、各個の時期や位置とは無関係である。
2．掲載図面はすべて北を上に組んである。
3．掲載図面の縮尺は以下のとおりである。
遺構関係　全体図=１／200
遺物関係　原則として１／２（異なるものについてはスケールを参照していただきたい）
4．遺物分布図の記号は以下の意味を表している。
■＝古墳時代の遺物　□＝中世の遺物　●＝近世の土器類　☆＝古銭　△＝近代化以降の遺物
5．全体図のおよびその他の図面にあるスクリーントーンは以下の意味を表している。
▒＝撹乱　▨＝調査放棄範囲
6．土層観察などに用いた色調の表現は農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所票監修『標準土色帖』(1990) をもとにした。

目　　次

第１章　遺跡の位置と発掘調査の実施 …… 1
　第１節　遺跡の位置 …… 1
　第２節　発掘調査の実施 …… 2

第２章　諸環境 …… 3
　第１節　自然環境 …… 3
　第２節　歴史環境 …… 5

第３章　調査成果 …… 8
　第１節　調査された遺構と出土遺物 …… 8
　第２節　出土した遺構外遺物 …… 13

日向町遺跡のポイント …… 23

日向町遺跡の調査日記 …… 25

出土した主な遺物

巻末に発掘調査の成果をやさしくまとめてあります。児童の方などはそちらをご覧下さい。

第１章　遺跡の位置と発掘調査の実施

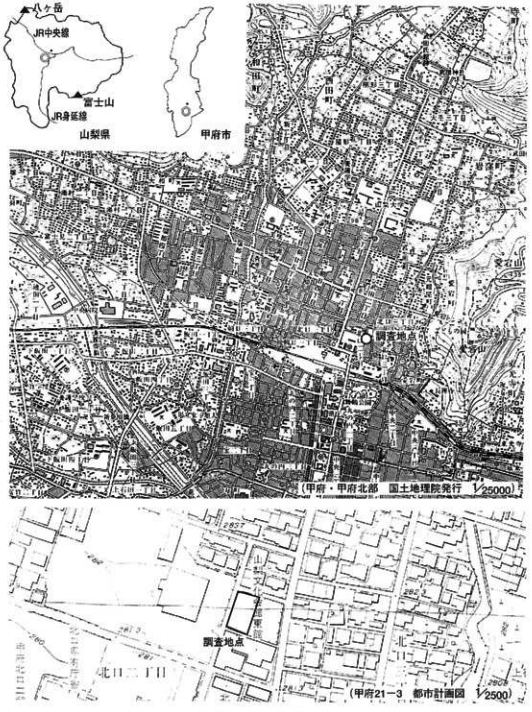
第１節　遺跡の位置

本調査地点は、山梨県甲府市北口２丁目14番地内である。調査前の様子は、山梨県公用車駐車場であったが、敷地内の西側に車庫を建設することとなり、この部分約500㎡が発掘調査の対象となった。

調査区４隅の国土座標は以下のとおりである。

北西　X座標：−37071　Y座標：6792　　北東　X座標：−37065　Y座標：6806

南西　X座標：−37046　Y座標：6784　　南東　X座標：−37042　Y座標：6800



第１図　周辺地図

第２節　発掘調査の実施

（事前協議）

平成10年山梨県総務部管財課より山梨県教育委員会学術文化財課に、車庫建設予定地内での埋蔵文化財の存在有無について照会があった。学術文化財課では、建設予定地周辺が県指定史跡である甲府城の追手門に近接し、当時の武家地が存在したことから、埋蔵文化財が存在していることを想定し、その規模を知るために同年８月より山梨県埋蔵文化財センターに調査を指示した。

（試掘調査）

同センターでは、約500㎡の建設予定地に対し15%の試し掘りを行なった。試掘調査方法は、重機による表土剥ぎを行なったのち、人力で遺物を含む地層（遺物包含層）を除去し、自然地盤である地山の上面（遺構確認面）まで掘り下げ遺構を探した。

試掘調査の結果、建設予定地内で古墳時代・中世から近世・近代化以降の土器類・石製品・鉄製品類などの遺物が出土し、中世から近世にかけての土坑や溝などの遺構が検出された。このことから、予定地内には中世から近世にわたる遺構・遺物が存在することが確認され、この旨を学術文化財課へ報告した。その後、学術文化財課では、試掘調査報告を受け建設予定地全面を対象にした発掘調査の必要から総務部と協議をおこない、平成11年４月より同センターが発掘調査を実施するにいたった。

（発掘調査）

試掘調査の結果を踏まえて、平成11年４月より発掘調査を実施した。発掘調査は、重機により舗装面及び表土を除去したのち人力にて掘削を開始した。出土遺物については原位置を保ち光波測量で記録、回収した。特に特徴的な出土状況であるものはＳ＝１／10の詳細図作成と写真記録を実施した。また、攪乱や細片で損傷の激しい出土品は一括扱いとして出土位置は記録していない。遺構の調査工程が確認された段階で遺構名を与え、検出状況の記録を行なった。その後、半截を行ない、土層断面の記録写真と実測を行ない完掘させ、平面実測図・断面図の作図と記録撮影を行ない終了とした。

測量については、すべて光波測量でおこない、記録のすべては国土座標に基づくデータとなっている。調査区内にはグリッド杭などは設定せず基準杭のみで対応したが特に生じた問題はなかった。

（整理調査）

遺構測量図については、発掘調査段階で作図し、現地にて照合・修正作業を行ったのでトレースを残すのみであった。出土遺物についてはすべて洗浄し、一括資料も含めて注記・分類作業を行った。また、特に重要と思われる資料及び残存状態の良好な資料については実測・写真撮影を行なった。

（関係法令手続き）

試掘調査および発掘調査に関わる法律手続きは次のとおりである。

［試掘調査］　平成10年８月27日　文化庁長官宛に発掘通知を提出　：文化財保護法98条２

［発掘調査］　平成11年４月23日　文化庁長官宛に発掘通知を提出　：文化財保護法98条２

　　平成11年６月４日　甲府警察署長宛に埋蔵文化財発見通知を提出　：遺失物法13条

第2章 諸 環 境

第1節 自然環境

本遺跡が所在する甲府市北口2丁目は甲府駅に近接していながら、多くの民家が建ち並ぶ比較的閑静な居住地域である。調査区周辺の標高は約282mである。

周辺の環境は、東に愛宕山（423m）と藤川があり、南には近世に甲府城が築城された一条小山と呼ばれる独立した丘陵が存在したところである。

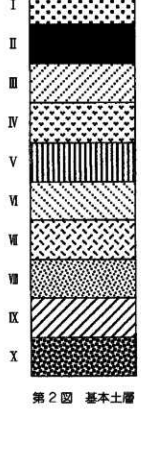
遺跡の立地する地形は、秩父山系から湧き出し、甲府市北部の山裾より盆地へ流れ込む藤川・相川により形成された扇状地に区分される。したがって、調査地点周辺の地形は北から南にむかって傾斜しており、これは発掘調査の結果からも調査区範囲内でわずかに北から南に傾斜して土壌が堆積していることが裏付けしている。

この周辺の地形区分をおこなったのが第3図である。図面中央に相川が流れ、荒川と合流している。相川より西は扇状地でもあるが、自然堤防による起伏が認められる。この場合、特に高位面などは積極的に生活の拠点として土地の利用がなされることが多く、少なくとも第3図の範囲のみでも相川より西に遺跡名を挙げないが、縄文時代以降の埋蔵文化財包蔵地の多いことが発掘調査や分布調査などによって捉えられている。

図の右に愛宕山の一部が描かれている。藤川は愛宕山の西側裾野を囲むような流路をとっている。藤川を挟んで2ヶ所の独立した丘陵が見える。このうち下の甲府駅に近い丘陵は、前にも述べた甲府城が築城された一条小山である。この2ヶ所の独立した丘陵の起源は不明である。

さらに第3図から読み取れることは、JR甲府駅周辺から東西幅約1.2kmは北から南に傾斜する比較的平坦な傾斜地と捉えることができる。これに歴史的背景を当てはめると、中世の武田信虎・信玄・勝頼親子3代にわたり築城し拠点としての役割を持った躑躅ヶ崎館はこの平坦な扇状地の北部に築かれ、城下町はその南側に展開していたと考えられている。近世の甲府城と城下町も同じくこの扇状地に造られていった。そして現在も県都としての機能を担う中心地である。

しかし、地形としては、本来は相川以西と同じような区分が可能であったのだが、2度にわたる城郭と城下の建設と近代化の中で、大小含め幾度もの造成が行なわれ、平坦化してきたのではないかと考えることもできる。



第2図 基本土層

土層説明

I	表土層	平均堆積40cm	
II	黒褐色土	平均堆積30cm	地点により上面に砂層が観察される 上面で遺物下部で遺構確認ができる
III	暗褐色土	平均堆積30cm	遺構掘り込層
IV	明茶褐色土	平均堆積40cm	細粒砂質土の自然堆積層
V	褐灰色土	平均堆積10cm	粘性土の自然堆積層
VI	褐灰色土	平均堆積20cm	粘性土の自然堆積層 V層と比較し空隙が認められる
VII	浅黄橙色土	平均堆積20cm	粘砂性土の自然堆積層
VIII	黄橙色土	平均堆積60cm	粘性土の自然堆積層
IX	明黄褐色土	平均堆積20cm	ローム質土の自然堆積層 含水率が非常に高い
X	褐灰色	粘土層	

第３図　周辺地形分類図　『塩部遺跡』報告書掲載図を加筆転写

（基本土層）

調査区北東で、調査地点周辺の堆積状況を把握する目的で深堀掘削をおこなった。

第２図は掘削地点の西壁での堆積状況である。Ⅰ層は表土層で、建設廃材などがほぼ全面で確認された。遺物を含むのはⅡ層で、調査区全域で確認される上層である。堆積厚もほぼ均一で古墳時代から中・近世の遺物はこの層より出土する。また、Ⅱ層上部は調査区の一部で川砂層の堆積が認められる。遺構はⅡ層下部から堀込まれⅢ～Ⅳに達している。

第２節　歴史環境

調査地点周辺の地域の恒常的な土地利用がなされ始めたのは、中世武田信虎・信玄・勝頼親子三代の時代で、居館である躑躅ヶ崎館（国史跡・現武田神社）が造営されてから以降のことである。これ以前の原始・古代にも人の痕跡を見ることはできるが、県都という土地柄、都の機能を備え発展し始めたのは武田以降といえる。

武田時代の1519（永正16年）に完成した躑躅ヶ崎居館とともに進行した街作りでは居館の南側に家臣団屋敷と町人地が坊条に城下を形成し、国内の中心地としての機能を担っていた。この時期には、広庭町元穴山町・手子町・城屋町・柳町・大工町・元連雀町・畳町・竪町・細工町・新紺屋町・愛宕町・三日町・上横沢町などといった地名が南北四条の通りと、東西数条の小路で区画され甲斐府中とされた。

1581（天正９年）に勝頼が韮崎市の新府城に居城を移したが、城下の実質的な移動はなく、甲府城が築城されるまでは甲斐の中心であることに大きな変化を迎えることはなかった。この府中については今現在詳細な規模や範囲、街割を描くものが確認されておらず、『甲斐国志』に代表される文献で実像に迫る方法と、埋蔵文化財の発掘調査という方法が有効と考えられる。

甲府城（県指定史跡）は、相川・富士川に挟まれた、一条小山と呼ばれる小高い山に16世紀終末から築城された本県唯一高石垣を持つ近世城郭で、正式には甲斐府中城という。

築城経過は、1582（天正10年）に織田・徳川の連合軍により、武田は終焉を迎え、甲斐は織田領となった。しかし、本能寺の変の後、甲斐領を巡って小田原北条氏と徳川の間で争いが起こり（天正壬午の戦い）、これに勝利した家康は、城代平岩親吉を代官とし、甲府城築城を開始させた。平岩は、一条小山を選地したが、家康関東移封に伴い1590（天正18年）豊臣秀吉の甥羽柴秀勝が入部した。秀勝は１年足らずで美濃に移封となり、加藤遠江守光泰が1591（天正19年）に甲斐を拝領し一条小山に本格的な築城を開始した。翌年に起こった文禄の役に出陣しながらも、朝鮮半島から城代に進捗状況を尋ねる書状（大洲加藤家文書）を送っている。半島で病没した光泰のあと、豊臣五奉行の浅野弾正長政とその子幸長親子が1593（文禄２年）近江より合せて21万５千余石で入部し、甲府城と城下の初期の様相を完成させた。

その後徳川政権下では、1704（宝永元年）柳沢吉保・吉里の15万余石の入部まで徳川義直、忠長、綱重・綱豊（甲府家）と徳川の直轄支配が幕末まで続き、吉里移封後は再び幕府領となり明治を迎えた。

甲府城は、豊臣時代には対徳川を牽制する城として、徳川時代には江戸の西方を守る要として、築城以来戦略の拠点的役割を持ち、その役割に相応しい人物が配されてきた。

その甲府城下の様相は、築城期と柳沢時代に大きな変化を迎えている。築城が進行すると、浅野は武田時代の城下を城郭の東南側にあった青沼郷を中心に新しく移し、古府中（上府中）に対して新府中（下府中）と称された。新しい町人地は、城の南東の位置で三の堀に囲まれ、南北４条、東西６条に町割りがされ、甲州街道が東西に抜けている。町名には大工町、三日市、八日市、伊勢、連雀などが23町、山手門北西にも紺屋・細工・穴山など26町が古府中から移転して城下の生活基盤を築いた。武家地は城代・城番制が敷かれ、支配者が在勤しなかったため、甲府在勤の家臣は少なく、大手門の正面に広がっているが範囲は狭い。

次の変化は、江戸中期に柳沢が入部し、甲府藩を立藩した段階である。柳沢の入部は、甲府城築城から１世紀余りも経たときである。綱重も城郭の修築を行なったが、石垣や土手、門の破損が目立ち、城郭自体の軍事から政治的要素へ機能の移行を含めて大掛かりな修築が必要とされた。城下も、城代・城番制時代とは異なり、藩主が在勤となるため、15万石余の規模の家臣団も入国してくる。しかし、従来の武家地では家臣団を賄うことはできず、武家地を中心に城下町の再編の必要性が生じた。

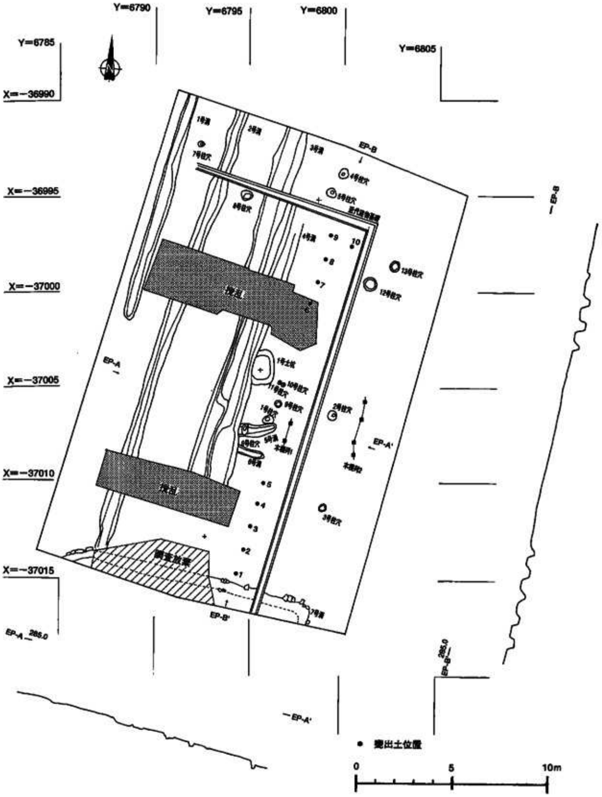
修築事業は1705（宝永２年）11月付書状「楽只堂年録」と1713（正徳３年）幕府に提出された「甲斐国府中城修理願書絵図」から、修築内容や各門・曲輪の名称変更と新規の普請・作事の内容が分かる。城下についても同書状で、古府中等の名称を禁止し府中への統一や、町名の変更、移動した町名の新旧を表すのに用いた古の字の使用を止め、元の字を使用することなどが記載されている。このことから柳沢は、城郭・城下に対する根本的な

再構築事業を実施したことが窺える。

甲府城が築城された16世紀末から17世紀の絵図文献資料は少なく、築城期と江戸中期の城下の比較は容易ではない。現在のところ寛永年間まで頃の城下を描いた絵図「極秘諸国城図」（城山公園管理事務所蔵）が最も古い。同絵図には郭外の北側は空白地として描かれ、家臣屋敷は城郭の南側で展開している。しかし、江戸中期の絵図では武家地は大手門南側と西側に拡張され、新規に山手門の北西に武家地を設け、筆頭家老柳沢権大夫や柳沢市正等の名前があることで、武家地の拠点が南から北に移動したことがわかる。人口も1670（寛文10年）は推定1.3万人に対し1720（享保 5 年）は推定1.4万人に増加するが、その後は減少する。1724（享保 9 年）柳沢移封後の城下は、大火や災害に見舞われることが多々あったが、町割は継承され、今日まで面影を伝えている。

これらの歴史景観は、今回の発掘調査の遺物出土品からも読み取ることができる。特に焼き物を中心にみると中世から近世前半にかけては素焼系が多く、陶磁器系が少なく、近世後半にかけてその数量が逆転することが判明する。特に近世後半から陶磁器系の出土量が増加することは一般的である。しかしながら、本県の場合特に甲府城と城下武家屋敷地との相関性がうかがえる。

第４図　江戸時代中頃の城下町割と現代の比較（原図は大木文夫氏ら作成）



第５図　発掘後の日向町遺跡全体図（縮尺1／200）

第３章　調査成果

この章の第１節では、発掘調査により検出された遺構、第２節では出土した遺物（土器などの生活道具）の詳細を説明する。柱穴以外の遺構については位置、大きさ、形態、堆積状況、時期、出土遺物の観察事項を記載した。また、実測図は上を北に組み、縮尺は１／40を基本とした。

遺構出土遺物については、１号土坑以外はほとんどない。また、実測図は遺構出土、遺構外出土も１／２を基本とし（古銭は原寸）、特に残存状況の良好なものを掲載した。

第１節　調査された遺構と出土遺物

検出された遺構は、土坑１基、柱穴13基、溝７本、木柵列２本、埋甕10基、石組み水路１本である。各々の時期については以下に詳しく述べるが、中世から近世の所産であるものが大半である。

土坑

１号土坑

（位　置）　調査区中央で検出された。中心部の座標はＸ＝－37008　Ｙ＝6796

（大きさ）　長軸1.87×短軸1.29×深さ0.51（ｍ）

（主　軸）　Ｎ－2°－Ｅ

（形　態）　楕円形であるが、西側壁は溝により消失している。

（堆積状況）　４層に区分できる。１は黒褐色土。焼土粒子、炭化材が多く混じる。２は暗褐色土。焼土粒子、炭化材が多く混じる。３は黒褐色土。４は黄褐色土である。３、４層には遺物は入っていない。

（出土遺物）　第６図が示すように、土坑の上面の中央部やや南でかわらけの完形品が２点、古銭が９枚、その他にかわらけの破片、瓦片と炭化材が集中して出土している。覆土からは、遺物がほとんど出土していない。

遺物の出土状況から考えられるのは、出土状況や周辺地域の事例から近世の墓坑と考えられる。しかし、骨などが覆土中からは確認されていない。

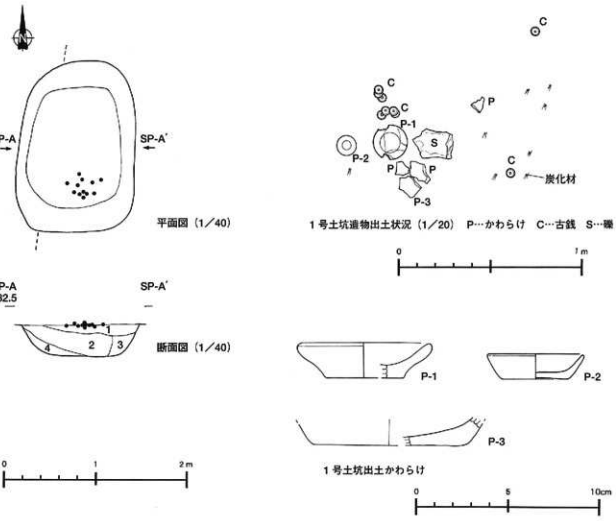
大形のかわらけは、直径10.2㎝、器高2.2㎝を測り、破片化しているがほぼ完形である。胎土に白色粒子と雲母を含み、色調は赤褐色である。小形のかわらけは、直径5.4㎝、器高1.4㎝を測り、口縁部がわずかに欠ける程度である。胎土に白色粒子と雲母を含み、色調は赤褐色である。

古銭は９枚出土しているが、７点はかわらけなどとともに集中部から重なるように出土し密着している。残り２点は周辺から出土している。古銭は判読できるものは４点ですべて寛永通宝である。

礫は扁平であり、石材は泥岩である。一部に自然面を残すが、縁辺部から剥離されている。

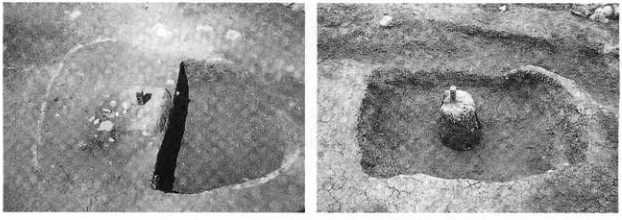
炭化材は遺物集中の周辺で多く検出されている。第６図で図示したものは大きさが約３㎝以上のものであるが、細かな粒子も多量に検出されている。

遺物出土状況（西より）



第６図　１号土坑実測図・かわらけ実測図

第７図　１号土坑出土古銭



半截状況（東より）　　完掘状況（東より）

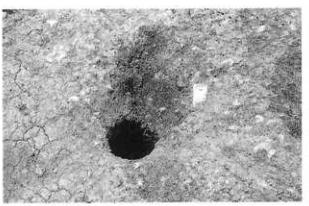
柱穴

検出された柱穴は13基で、調査区全体に散在する配置状況で検出された。配置状況や規模に規格性がないことなどから、各個の関連性は薄いように考えられる。所産時期については、覆土の堆積状況や出土遺物から江戸期と考えられるが、詳細な時期区分するにはデータが少ないため困難である。

特徴としてあげられるのは、1・2・3・5・6号柱穴の底部には、小柱穴痕が確認されている。

遺構名	位　置	中心座標（X・Y）	形状	規模（単位／m）	時期	備　考
1号柱穴	調査区中央南	−37006.625・6795.844	不整円	0.64×0.49×0.27	近世	底部に小柱穴
2号柱穴	調査区中央東	−37006.438・6799.375	円　形	0.55×0.50×0.25	近世	底部と中段に小柱穴
3号柱穴	調査区東南	−37011.250・6798.813	不整円	0.34×0.30×0.31	近世	
4号柱穴	調査区北	−36933.750・6799.813	円　形	0.58×0.50×0.31	近世	
5号柱穴	調査区北	−36994.719・6799.219	楕円形	0.58×0.44×0.29	近世	底部に小柱穴
6号柱穴	調査区南	−37007.156・6794.688	楕円形	0.68×0.35×0.35	近世	底部に2小柱穴
7号柱穴	調査区北西	−36992.250・6792.375	円　形	0.31×0.28×0.22	近世	
8号柱穴	調査区北西	−36995.000・6794.688	楕円形	0.61×0.52×0.21	近世	
9号柱穴	調査区中央	−37005.913・6796.469	不整円	0.42×0.28×0.11	近世	
10号柱穴	調査区中央	−37004.813・6796.719	不整円	0.20×0.15×0.08	近世	
11号柱穴	調査区中央	−37004.719・6796.531	不整円	0.18×0.13×0.07	近世	
12号柱穴	調査区北東	−36999.438・6801.281	円　形	0.71×0.68×0.22	近世	
13号柱穴	調査区北東	−36998.500・6802.594	円　形	0.53×0.51×0.13	近世	

4号柱穴



5号柱穴

7号柱穴

12号柱穴

溝

検出された溝は７本で、調査区全体に散在する配置状況で検出された。配置状況や規模に規格性がないことなどから、各個の関連性は薄いように考えられる。所産時期については、覆土の堆積状況や出土遺物から江戸期と考えられるが、詳細な時期区分するにはデータが少ないため困難である。

１号溝は調査区の西端で検出されている。調査区の中央が溝の南端であるが、北方向はさらに延びている様相である。壁面は緩やかに立上がり、底部はやや起伏があるが平坦で、南方向への勾配が認められる。

出土遺物は少なく、時期を特定できないが、２号溝との関係から中世と推測できる。

２号溝は１号溝の東側で検出され、調査区を南北に貫通している。１号溝とは並行している。幅の大きさや底部、壁の状況などは１号溝と酷似している。

出土遺物は少ないが、出土土器片などから中世と推測できる。

３号溝は調査区中央を南北に貫通して検出されている。北端は全体図では描かれていないが、これは撹乱により消失、あるいは調査放棄したものである。１・２号溝と並行しているが、幅は大きく、深い溝であることからやや異なる様相をもつ。

４号溝は３号溝の東側に一部重複して検出されている。北端は途中で消失しているが、南はさらに延長するものと推測できる。３・４溝ともほぼ同位置で溝の幅があるいは底部の幅が大きくなることが確認できているが、付属施設などは検出されていない。時期は出土遺物から江戸期である可能性が高い。

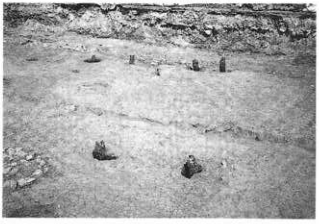
５・６号溝は調査中央で東西方向に検出された小さな溝である。西側で４号溝と重複しているが新旧関係は不明であり、時期についても不明である。

７号溝は調査区南端で東西方向に検出された。掘り込をもつが部分的に割石を配している。割石はわずかにしか残存していないが、溝の立上がりの縁の両側で石面を内側にあわせて１段配されている。機能や時期については不明である。

遺構名	方　位	座標（X・Y）	規模（単位／m）	時期	備　考
１号溝	N－18° －E	南端座標　－36989.900・6791.750 北端座標　－37001.375・6788.500	12.1×0.80×0.21	中世	２・３・４号溝と平行
２号溝	N－18° －E	南端座標　－37013.375・6787.125 北端座標　－36990.700・6794.500	24.0×0.90×0.25	中世	１・３・４号溝と平行
３号溝	N－18° －E	南端座標　－37009.375・6792.250 北端座標　－36991.750・6797.250	18.8×1.30×0.28	中世～近世	１・２・４号溝と平行
４号溝	N－16° －E	南端座標　－37009.813・6793.000 北端座標　－36996.188・6797.500	15.1×0.92×0.21	近世	１・２・３号溝と平行
５号溝	N－84° －E	東端座標　－37007.063・6796.313 西端座標　－37007.188・6794.500	2.10×0.60×0.06	不明	
６号溝	N－108° －E	東端座標　－37008.625・6795.813 西端座標　－37008.250・6794.438	1.60×0.41×0.07	不明	
７号溝	N－104° －E	東端座標　－37016.875・6797.938 西端座標　－37014.000・6785.750	13.3×0.49×0.20	不明	側線に石積みをもつ

3号溝掘り上り状況（南より）

7号溝東部分検出状況（南より）



木柵検出状況（西より）

近代甕検出状況（南より）

2号溝掘り上り状況（南より）

近代甕検出状況（北より）

第9図　調査された遺構

第２節　出土した遺構外遺物

本節では発掘調査により遺構外から出土したものを中心に報告する。前節で実測図を掲載したものについては割愛する。また、撹乱などから出土し、明確な出土状況が不明なものについても一括と明記し掲載した。

実測図は完形あるいは完形に近いものを選択したが、出土量が少ない古墳時代と中世の遺物は極力すべてを掲載した。また、実測図は１／２を基本とし、特に近世・近代以降は残存状況の良好なものを掲載した。

全体的な出土の様相については下表を資料に解説する。

今回の調査で出土した遺物は467点であり、その内訳は250点（53.5%）が遺物包含層及び遺構が確認されたⅡ・Ⅲ層中からの出土で、残りの217点（46.5%）が表土や撹乱からの出土である（第10－１図）。

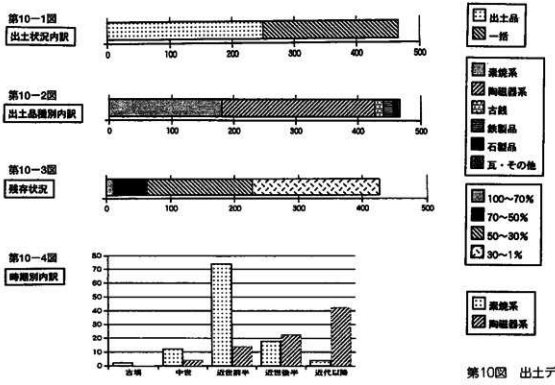
この467点の種類別内訳（第10－２図）では、陶磁器類がもっとも多く246点（52.6%）となっている。しかし、この数値には時期別の要素が含まれていないので、近代化以降の陶磁器類の数量も含まれている点を明記しておく。いづれにせよ、素焼系・陶磁器系の焼き物が多いことに変わりはない。

残存率状況（第10－３図）は完成後の形状から考えて100～70%を完形ないしはほぼ完形、70～50%を半完形、50～30%を破片、これ以下を小破片とした。

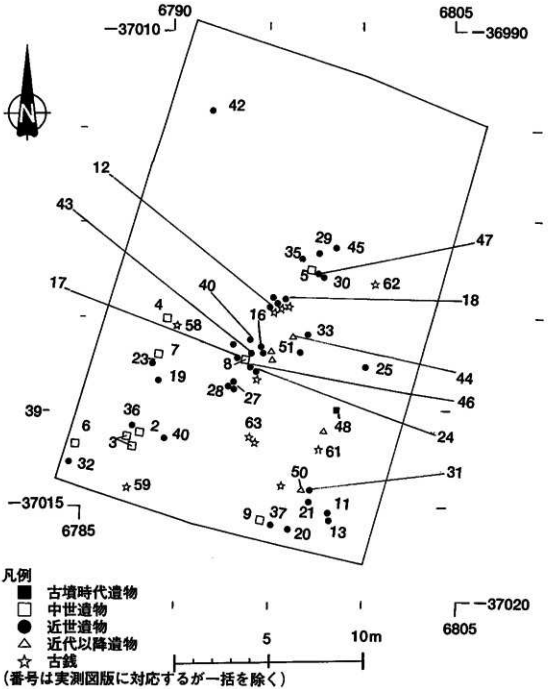
時期別内訳（第10－４図）は素焼系・陶磁器系の土器についてのみの数量である。対象数は素焼系127点、陶磁器系82点、合計209点で、古墳時代・中世・近世（18世紀以前・以降）・近代と分類した。

中世から近世前半にかけては素焼系が多く、陶磁器系が少ないが、近世後半にかけてその数量が逆転することが判明する。この近世後半から陶磁器系の出土量が増加する事例は一般的である。しかしながら、本県の場合さらに甲府城と城下武家屋敷との相関性がうかがえる。第２章２節でも述べているが、城下における家臣屋敷が北側の山の手側に大きく展開され始めるのは、家臣屋敷地が不足しはじめた1704（宝永元年）の柳沢氏の入部以降である。したがって、遺物出土様相から伺える近世後半に属する遺物が多く出土する原因は、柳沢氏以降の武家地開発が背景にあるといえる。

さらに、１号土坑のような事例は本県では少なく、むしろ東京都心の調査事例で見ることができ、当時の武士の移動との関わりもここで考えることができる。



第10図　出土データ表



第11図　遺物出土状況

（古墳時代）第12図 1

1は古墳時代初頭に属す壺の口縁部分である。表面には縦方向のハケと内面にはミガキによる調整が観察できる。古墳時代に属す遺構や、遺物出土量も少ないことから外部からの流れ込みなども考えられるが、摩滅は認められない。

（中世）第12図 2～10

2～8はかわらけで、2～4は表裏面が黒色である。器種はすべて皿であるが、5は灯明皿である。底部が残存するものはすべて糸切り痕が観察できる。黒色のかわらけは、煤状の付着物によるものだが、3は口縁部にタール状の付着物が認められる。9は国産陶磁器で瀬戸焼きの碗である。10は国産陶磁器で瀬戸・美濃系天目の碗である。

（近世前半）第12図11～19・第13図20～36

11～19はかわらけである。この他に第12図には掲載していないが、1号土坑（第6図）から出土した3点もこの中に入る。11～14は器厚が平均3～4㎜と薄いかわらけで、出土品の中でみるとやや特徴的なかわらけである。4点は大きさもほぼ均一で、胎土も雲母や特に黒色の粒子を他のかわらけよりも多く含む。この特徴を持つかわらけは、東京都での出土事例が多く、出土した4点も江戸からの流入品の可能性も考えられる。

15～22もかわらけであるが、器厚も6～7㎜と厚く、11～14とは区別される一群である。器種は皿で、胎土に雲母や小礫、白色粒子の混入が認められる。15・16は同一の形態で、側面の立上がりが約60°と急角度で、大きさは小形という特徴がある。胎土も17～19よりもやや緻密である。16は灯明皿である。17～22は器厚も厚く重量感があるかわらけである。胎土は11～14と似ているが、比較すると粗い。側面の立上がりが約40°と緩やかである。

23は擂り鉢の底部である。胎土は白色で8本1刷りの溝が観察できる。破損断面にはタール状の付着物が残存し、補修の痕跡と考えられる。

24～26はかわらけ及びかわらけを素材としたものではあるが、特徴的なため区分した。24は緻密で白色の胎土であるが、掲色の文様がまだら状にある。器厚は3㎜と薄い。25は土器片の破損断面を研磨し、円形に整えた土製品である。26は出土した中で最も小さなかわらけである。形としては第12図18に極めて類似している。また、1号土坑からも類似する小形のかわらけが出土している。

27・28は大皿の口縁部である。両者表面は煤状の付着物が認められ、胎土には雲母が混入されている。29は大皿の口縁部の内側に円形の把手が付くほうろくである。付着物や胎土は27・28に類似している。30は大甕の底部である。器厚は厚く、縦の仕切りが作られている。胎土に白色の粒子が含まれる。31は鍋の底部である。内面には3本1組の工具による削り痕が観察される。右上から左下方向の痕跡で、およそ45°の3㎝間隔である。29～35は口縁部がほぼ垂直に立ち上がるホウロクの一群である。36は鉢の口縁部である。

（近世後半）第14図37～47

37はホウロクの底部である。灰釉で底部から壁面へはほぼ垂直に立ち上がる。胎土は白色である。瀬戸美濃系である。38は大皿の底部である。素焼で底部から壁面へはほぼ垂直に立ち上がる。器厚は37より厚い。底には液体が炭化したような付着物が認められる。39は小形の皿である。素焼で、胎土に白色の粒子を含む。40～43は国産の陶磁器群である。

44～47は塩焼壺とその蓋である。44には「泉濱伊織」、45には縦行にわたり「サカイ／□麻足□」の印が見られる。47は残存状況が悪いため印などは確認できない。また、46は蓋であるが、単独で出土したもので、47との組ではない。

（近代以降）第14図48～51

48・49は椀で菊の花をモチーフとし、連続に描いた染め付けの陶磁器である。同一個体ではないが、同じ組のものであろう。50は甕の底部。51は茶わんで表面に波のモチーフがあり、内面には帯文様が観察できる。

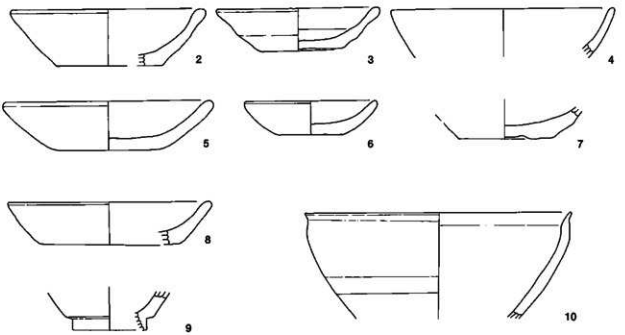
52～57は明治から昭和初期にかけて大形の甕である。第5図の全体図も図示しているように調査区の南北方向に直線的にならび規格性が伺えるが、素焼きのものと灰釉の2種類がある。おそらく、以前この地にあった製糸工場に関係する甕ではないかと考えられる。

（古銭）第16図58～65

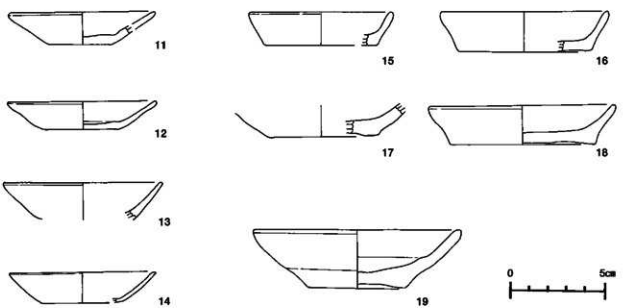
古銭は調査区から散在する出土状況である。58は「□武通宝」、59は「□元通宝」、60は「開元通宝」、61は「天□通□」、62は「開元通宝」、63は「寛永通宝」、64表は「大□□□」、裏は「申」である。遺構に伴って出土したものはない。

古墳時代

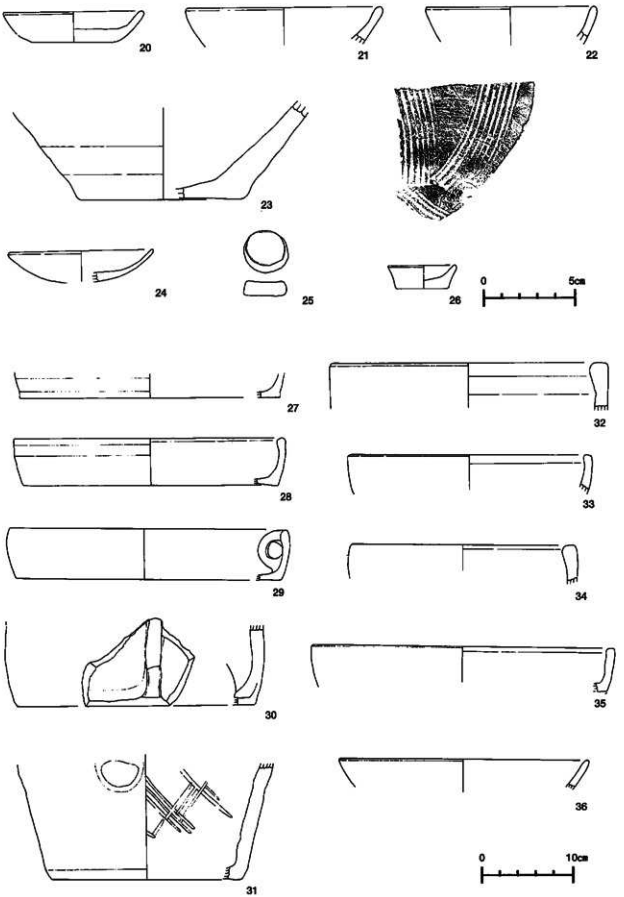
中世（戦国期）



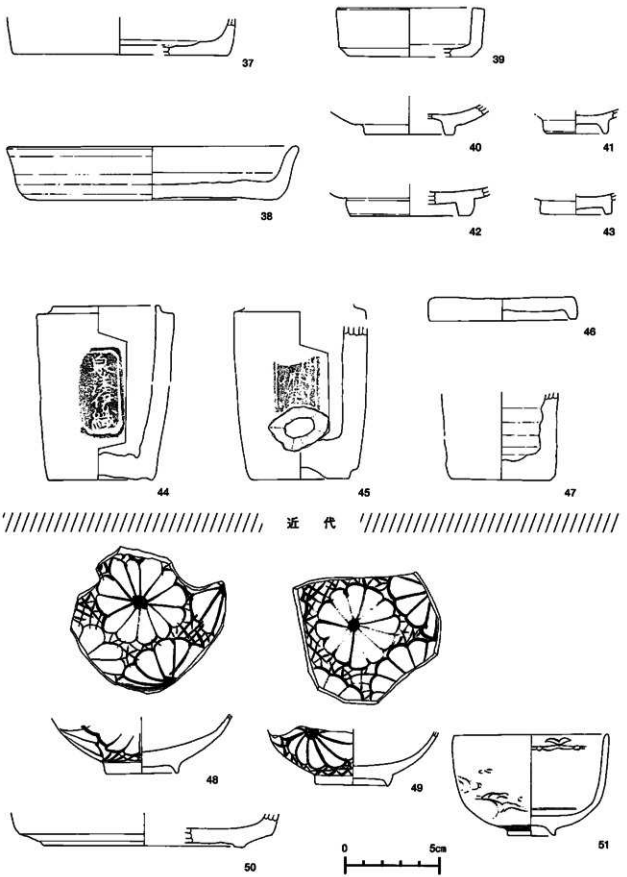
近世（江戸期）



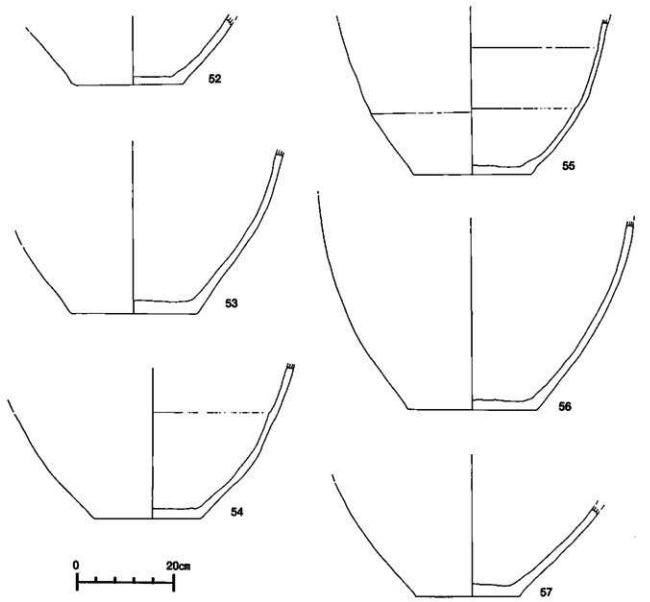
第12図　遺物実測図(1)



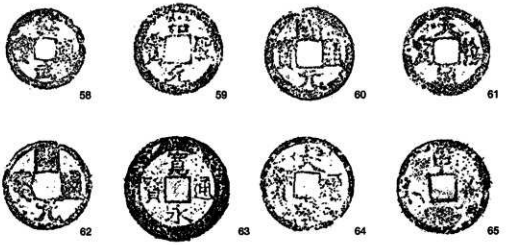
第13図　遺物実測図(2)



第14図　遺物実測図(3)



第15図　遺物実測図(4)



第16図　古銭拓本(5)

中世の遺物

1

2

3

近世の遺物

4

5

6

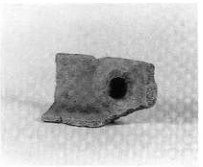
7

8

9

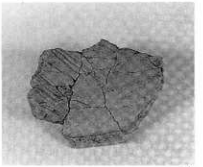
10

11



12

13



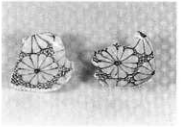
14

15

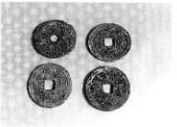
16

17

18



19



20

21

古　銭

22

23

24

25

調査記録写真

調査終了状況(1)（南より）

調査終了状況(2)（東より）

遺構検出状況（北より）

土層堆積状況（南壁）（北より）

深掘り地点堆積状況（北壁）

調査状況(1)（北より）

調査状況(2)（北より）

遺跡のポイント

甲府という街の始まりはいつか知っていますか？

それは今から約480年前の戦国時代、武田信玄のお父さんである武田信虎が躑躅ケ崎館（今の武田神社の場所）を造ったことが始まりと考えられています。当時の山梨は甲斐国と呼ばれ、国の中心を府中とも呼ぶことから、それぞれの頭の一文字を取って、「甲府」という地名が誕生しました。そして、躑躅ケ崎館からＪＲ甲府駅北口周辺に武士の屋敷や商人・職人が住む場所ができ、城下町がつくられました。

しかし、武田氏は滅び、戦国時代の終わり頃に、豊臣秀吉によって甲府城が造られました。現在の甲府城跡はお城の中心部分しか残っておらず、城下町の名残も薄れてしまいましたが、古文書や絵図から、当時は全国のお城と比較しても非常に大きなお城と賑やかな城下町であったことがわかっています。

日向町遺跡のある場所も、古い絵図などから戦国時代から江戸時代の終わりまで、武士の屋敷などであったことがわかっています。それより前のことははっきりとしませんが、古墳時代の土器片がわずかに出土していることから、昔から生活していた可能性があります。

日向町という遺跡名は当時呼ばれていた古い地名が由来です。

日向町遺跡から出土したもの

発掘調査をすすめていくと、土の中からいろいろなものが出土します。最も多いのは、素焼きの土器や陶磁器など日常的に使ったお椀や皿、鉢などです。他にも調理に使った擂鉢や、キセルと呼ばれるタバコを吸う道具なども出土しています。いろいろ観察すると土器の色などから甲府がもっとも栄えた江戸時代中頃の道具が多いようです。

発掘調査でわかる江戸時代の甲府

調査をはじめる前は絵図などから、甲府城に勤務していた武士の屋敷跡が発見されると考えていましたが、屋敷の跡などはっきりとした跡は見つかりませんでした。しかし、江戸時代のお墓と思われる穴が発見され、お供えのお金（寛永通宝）やお供え物の小さなお皿が出土しています。きっとこの辺りに住んでいた武士に関係する人のものではないかと思われます。

また、出土した土器の量を見てみると、戦国時代から江戸時代はじめ頃の出土遺物はすくなく、陶磁器なども数える程度しかありません。しかし甲府が栄え始めた江戸時代の中頃から遺物の量は多くなり、江戸時代の後半には特にいろいろな形の陶磁器が大量に出土し、素焼の土器はなくなってしまいます。このことからも、江戸時代の中頃以降は甲府の城下町も発展し人口も増え、色々な種類の商品が流通した様子が分かります。

全体を見ると江戸時代初めの土器は少なく、終わりの頃になると量が多くなりました。そこから甲府の城下町の発展の様子が分かります。人口が増えると当然使う道具の種類も量も増えて、形も色々なものが登場してきたのだろうと考えられます。

日向町遺跡関係年表

旧石器時代		500万年前	世界最古の人類
	前期	60万年前	日本最古の人類
	後期	3万年前 1,3万年前	
縄文時代	草創期	10,000年前	土器作りが始まる
	早期	7,500年前	
	前期	4,500年前	
	中期	3,000年前	
	後期	2,000年前	
	晩期	1,000年前	
弥生時代	前期	BC.300	稲作の開始
	中期		卑弥呼の活躍（239）
	後期	AD.300	
古墳時代	前期		数点の土器しか出土していませんが、この時代から周辺に人が住んでいたことが想像できます。
	中期	AD.400	
	後期		大化の改新（645）
奈良平安時代		AD.900	平城京遷都（710） 平安京の遷都（794）
鎌倉時代		AD.1200	鎌倉幕府を開く（1192） 武田時代の城下町でもあり、発見された清や土器の破片は当時この辺りに住んでいた人のものかも知れません。
室町戦国安土桃山時代		AD.1200	室町幕府を開く（1397） 川中島の合戦（1553～） 武田家滅亡（1582） 豊臣秀吉全国統一（1590） 甲府城完成（1600頃）
江戸時代		AD.1200	徳川家康江戸幕府を開く（1603） 柳沢吉保・吉里受封（1705） 柳沢氏が甲斐に来て、お城も城下町もきれいでにぎやかになりました。日向町遺跡から出土したものは、この時期以降のものが多いようです。
明治時代		AD.1200	大政奉還（1867）
大正			第1次世界大戦（1914）
昭和			大平洋戦争（1941）
平成		2000	

日向町遺跡からは写真のように江戸時代のお皿や古銭が出土しました。

日向町遺跡の調査日記

ここでは日向町遺跡の発掘調査から、整理調査と報告書が出来上がるまでを説明します。

まず最初に埋蔵文化財とは…

地面の下にある土器や石器などの遺物（生活道具など）や、住まいの跡などの遺構（不動産）を埋蔵文化財と言います。道路やダム、学校や住宅を作るために地面を掘る前に、法律（文化財保護法）にしたがって埋蔵文化財の確認をしなければなりません。県や各市町村の教育委員会には資料があり、相談に乗ってくれます。

遺跡を探る試掘調査とは（平成10年夏の出来事）

埋蔵文化財の存在の確認や性格、時代や規模などを事前に知る調査を試掘調査といいます。発掘調査の計画の参考にします。日向町遺跡の場合、遺跡の場所が近世（江戸時代）には甲府の城下町であったことがすでに分かっていたので、どのようなものが埋まっているかを事前に知るために試掘調査をおこないました。

試掘調査では、写真のように部分的に掘り、遺跡の性格をさぐります。

いよいよ発掘調査開始です（平成11年春の出来事）

調査が必要な範囲を決め、土中に眠る埋蔵文化財のデータを集めて記録することを発掘調査（本調査）といいます。

日向町遺跡の発掘調査では、まず現代の地面を機械でどかします。土器のかけらなどが見え始めると、そこから先は人の手でスコップなどを使い、壊さないように丹念に掘ります。出土したものは、測量機で位置を記録します。穴や溝なども測量機や写真撮影で記録します。日向町遺跡のどこから何が出土したかを記録することで当時の生活を知る手掛かりとなります。

最初に上の地面を取り除きます。

発掘調査が終了すると、遺跡にはまた土がかぶせられ、いよいよ建設が始まります。しかし、埋蔵文化財の調査は場所を変えて続きます。

パズルのように細かな仕事、整理調査
（平成11年夏以降の出来事）

土器など遺物に注意しながら掘っていきます。

整理調査とは、出土した遺物や作成した測量図をまとめることで、屋外ではなく室内で進める作業です。下の写真のような仕事を経て、最終的に皆さんが今手にしている「日向町遺跡発掘調査報告書」という一冊の本になります。日向町遺跡は建物の下に埋まって二度と見ることはできませんが、この本に生まれ変わり後世に当時の文化を伝えていくのです。

なお、出土した遺物や掲載した図面・写真などは県埋蔵文化財センターに保管してありますので見ることができます。また、県内遺跡の出土品や情報は県立考古博物館・埋蔵文化財センターで知ることができるのでご利用下さい。

・[所在一覧]

武田氏館跡	国指定史跡	甲府市古府中・屋形３丁目・大手３丁目
甲府城跡	県指定史跡	甲府市丸の内１丁目
県立考古博物館		東八代郡中道町下曽根923　055（266）3881
県埋蔵文化財センター		東八代郡中道町下曽根923　055（266）3016

出土した遺物には全て番号をつけます。これを注記といい、日向町遺跡でいつ、どこから出土したのかという情報をいれます。

これは接合作業といいます。土器はこなごなになって出土しますが、破片をあわせてもとの形にします。

石コウを入れたあとは細かくけずって形を整えます。

石コウ入れ作業です。復元しても破片が不足する場合は石コウを入れ復元します。

形が復元されると実測作業に入ります。この作業では土器の細かな部分まで観察し描きます。そして報告書に。

報告書抄録

ふりがな		ひゅうがまちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名		日向町遺跡発掘調査報告書
シリーズ		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第170集
執筆者		八巻 与志夫　　宮里 学
発行		山梨県教育委員会
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話		〒400−1508 東八代郡中道町下曽根923　電話 055−266−3016
印刷所		山梨県甲府市丸の内1丁目14−6 （株）ヨネヤ
印刷・発行日		1999年12月20日　1999年12月24日
所在地		甲府市北口2丁目14番地
地図名・位置		1／25000 「甲府」 北緯 35° 40′ 02″　東経 138° 34′ 31″　標高 282m
概要	主な時代	中世〜江戸時代
	主な遺構	土坑・溝
	主な遺物	土器類・陶磁器類・古銭
	特記事項	墓坑及び墓坑出土遺物（小形土器・古銭）
	調査期間	1999年4月16日〜1999年5月21日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第170集

日向町遺跡発掘調査報告書

—公用車車庫建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

印刷日　1999年12月20日
発行日　1999年12月24日

編集　山梨県埋蔵文化財センター
発行　山梨県教育委員会・山梨県総務部
印刷　（株）ヨネヤ